
勇者はじめました

ししだ じょうた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者はじめました

【Nコード】

N0594W

【作者名】

ししだ じょうた

【あらすじ】

魔族の王子、ダッツ。将来魔王になるはずの彼は、ひよんなことから勇者として人間を救うはめに。

頑張ってください勇者様ってお姫様にお願いされたらがんばるっきやないのか!?

馬鹿で間抜けな魔族の王子ダッツが魔王で最強チートの父親に挑むファンタジー!

注意・異世界召喚ものではありません。主人公はチートでもありません。主人公は救いようのない馬鹿です。以上のことをご注意ください

ださい。

プロローグ 魔族のプリンセスは が可哀そう(前書き)

先に述べさせていただきます。主人公は馬鹿です。 が可哀そうな人です。

脱字はあるかもしれませんが、一人称形式での文章展開の都合上、誤字に関しては仕様となっておりますので、ご理解お願いいたします。

プロローグ 魔族のプリンセスは が可哀そう

俺の名前はダッツ・ワン・ゲーライト。父親はローデス・ワン・ゲーライト名前ぐらい知ってるよな？

そう、ベルフェリン地方の魔族を統べる魔王だ。つまりその息子である俺は魔族の王子、そうプリンセスだ！

いずれは俺も親父の後を継いで魔王になり、人間どもを恐怖のずんどこにたたきのめすことになるわけだ。俺ってかっこいい！

しかし、ここでいくつか問題がある。

俺は一人息子だから親父の後を継ぐのは俺しかいないから跡目争いとかがじゃない。チートで最強な親父に逆らうような馬鹿はいないから、親父の失脚とかそういうのが問題じゃない。

何が問題って、退屈が問題だ。

ベルフェリン地方には大小20近い人族の国がある。その中でも巨大な国は軍事力に優れ周辺各国で最大の領地を誇るヴェルチエ帝国、豊富な資源と様々な技術に特化したリオデンテ王国、多くの魔法使いと魔術師を有するタイム魔法共和国の3国だけで、残りは有象無象。

3国以外は抵抗も諦めて俺たち魔族に服従する国もあれば3国のどっかにすり寄って細々と暮らしてる国もある。結局のところ、この3つの国を滅ぼしてしまえばこのあたりで魔族に逆らう国はなくなってしまう。

チートで最強で反則で天下無敵で、古今東西な親父だ。3国を滅ぼしてしまうのも時間の問題だろう。

この間も、リオデンテ王国が召喚したとかいう異世界の勇者を2秒で血祭りに投げていた。

つまり、そうつまり俺が親父の後を継ぐ頃には俺の仕事は何もないわけだ。

「退屈だ」

やることがない。今後やることになることもない。何をする気にもなれない俺は実に退屈なわけだ。

「ダッツ様、退屈などと言っている場合ではありません！」

俺に対して突っ込みを入れてくるのは俺の教育係にして魔族でも有数の実力者、リーザだ。親父の信頼が熱いリーザは俺が生まれた時から変わらぬ美貌と洗淨的かつこうしている。大胆に開かれた胸元は谷間を惜しげもなく周囲にさらしているし、ぱつつんぱつつんのタイトスカートは足の付け根ぐらいの長さしかない。パンツ見えそうじゃん。いい年して恥ずかしくないのかあのかっこう。

「ダッツ様？」

ギリリと俺の頭を握りしめるリーザ。やばい、頭が割れる。表情から考えてることがばれた臭い。

「嘆かわしい……ローデス様がいつ崩御なさるかわからないのですよ？あなた様はいつでもローデス様の後を継げるように日々頭と体の鍛錬を欠かしてはならないのです」

「いや、だつて親父が死ぬわけないじゃん」

親父の実力を簡単に説明すれば、腕を振るえば竜巻が起き、足を踏み出せば大地が割れる。魔法を放てば山が一瞬で消し飛ばされるような化け物だ。あの親父が倒せないような相手に俺が勝てるわけない。

「いいえいつ何時寝込みを襲われるとも限りませんし、ご病気にな

られるかもしれません」

寝込みを襲うにも親父はほとんど眠らない。眠る必要がない体だからだ。病気だって親父を前にしたら逃げ出すだろ。

「ダッツ様は魔族の希望なのです。偉大なる魔王であるローデス様のご子息であり、ご自身も強大な魔力を持ってお生まれになりました。……中略……。ですから、ダッツ様は……後略」

20分以上延々といかに俺が勉強するのが必要なことかを語るリーザ。まったく、毎日毎日同じ話をされるこっちの身にもなっただしい。

「わかった、わかったよリーザ」

「ご理解いただけましたか？」

「ああ、お前の言いたいことはよくわかった」

苦労が報われたように喜んでいるが、毎日同じ話をされるのは非常に退屈なんだ。

「お前が言いたいのはこのううことだろ？」

「はい」

「くどくどくどくど」

あ、リーザの額に青筋が浮かんだ。はっはっは、怒ると小じわが増えるぞ。

ん？なんで拳に魔力を込めてるんだ？

俺は魔族のプリンセスだぞ？殴ったら大変なことになるんだぞ！

「ちょ、リーザ。魔力こめすぎ！」

「問答無用お！」

親父を除けばこの魔王城で4番目の実力者が放つ魔力の込められた拳は人間の一個師団くらい軽く撃滅できる破壊力。

いや、死ぬってふつうこの威力は……

「痛いぞ、リーザ」

「愛の鞭です」

まったく、この女には俺様をうらやむ敬意ってやつがないのか。

「とにかく、今日の分のノルマが終わっていません。終わるまでは寝かせませんからね」

「それはベッドの中で聞きたいセリフだな」

いたっ！いや、無言で殴るな。

まったく、俺が親父の後を継いだら、こいつはクビだな。うん、いやクビは可哀そうだから俺とはかわりのない部隊に配属しよう。

「ダッツ様？」

ああ、わかったよ！勉強でもなんでもすればいいんだろ？

俺は机に積まれた本の一冊を手にとって適当に目を通す。ふん、せいぜいあと100年程度の我慢だ。親父もそれくらいになったら引退するだろう。

それまで待っていれば俺の天下が訪れる。俺が魔王になって人間どもを支配する世界が俺を待っているんだ。

もう一度言っておこう。

俺の名前はダッツ。ダッツ・ワン・ゲールライト。偉大なる魔王、

ローデス・ワン・ゲリライトの息子にして魔族のプリンセスだ。

プロローグ 魔族のプリンセスは が可哀そう（後書き）

性懲りもなく新作です。

更新頻度は低め、箱庭の気分転換程度に書くつもりです。

作者の意図的な誤字は以下の通りです

プリンセス プリンス 恐怖のずんどこ 恐怖のどん底
たたきのめす 叩き落とす 洗淨的 扇情的
うらやむ敬意 敬う敬意（さらに） 敬う心

プロローグで意図的に誤字としたところは以上です。

その他誤字などありましたら感想などで報告していただけると助かります

1話 リオデンテのお姫様

リオデンテ王国 首都・メキエスト

その日、リオデンテの首都であるメキエストには多くの人間でこった返していた。

人族だけでなく、エルフやドワーフ、獣人たちの姿も多く見えるのは資源豊かで温厚な人物が多いリオデンテならではの光景だった。これが人族至上主義であるヴェルチェ帝国であつたなら、これだけ多くの亜人と呼ばれる人間が大手を振って歩くことなどけしてかわないことだろう。

戦時中、それも凶悪で知られる魔族の軍勢との戦いであるというのにメキエストを行きかう人間に悲壮感はどこにも見られなかった。それも当然のことだろう。一月前異世界から召喚された望月大地という勇者が魔王討伐のために魔王領に入ったのだ。王国中の人間がその実力を知っており、誰もが勇者が魔王を倒すことを信じて疑っていなかった。

事実は民に知られていない。城の中でどれだけの混乱が広がっているのか城下に住む誰も本当のことを知らないのだ。

リオデンテ王国 王城

「勇者が敗れたことは間違いないのだな……」

勇者の首が収められた箱を前にして国王ジェレイは顔をしかめた。

国王と言うには年若いジェレイはまだ24になったばかりだ。先王ゼアが魔族との戦いで討死したのがきっかけになり異例の若さで国王として即位した。容姿は眉目秀麗と言う他なく、国中の女性が恋をしていると言っても過言ではない彼は、民だけでなく王国のあらゆる方面から期待されていた。

幼少のみぎりより武芸にも学問にも優れた彼は神童と呼ばれ育った。国政にも15で関わりを持ち、17になって初陣を勝利で飾った。民に対するプロパガンダなどではなくジェレイの実力で魔族に対して勝利をもぎ取ったのだ。そのことを知っている王国に所属する騎士は一切の例外なく彼に忠誠を誓いその命を惜しげもなく戦場で散らしている。

資源は無限にあると言われるリオデンテであれど、人の数には限りがある。ジェレイが戦場に出るようになってからも徐々に国境は侵され、国土の10分の1がすでに魔族によって奪われた。

苦肉の策として異世界から勇者を召喚したのはそういった経緯があった。幾重にも召喚時に能力を強化する術式を用いた結果、王国最強と言われる騎士を一撃で倒すほどの実力を有して召喚された勇者は実力、人望ともにリオデンテの光。ベルフェリンに住むすべての人間の光と言うに値する人物であった。

が、その勇者は今、屍の一部だけを友と呼んだジェレイの前にさ

らしている。

「ダイチよ……」

ジェレイの脳裏には彼と過ごした短いとはいえ濃密な日々が走馬灯となって思い浮かんでいた。魔王を倒しこの国に帰ってきたあかつきにはジェレイの妹、レシカに告白すると頬を赤らめながら言っていた望月大地と言う青年の姿を思い出し、ジェレイは頬を濡らした。

「さぞ、勇敢に戦ってくれたのだろう……」

大地の首を前にして臣下が見ているのをいとわず涙を流すジェレイを見て、玉座の周りにいる誰もが涙を流していた。

友を失ったジェレイを憐れむため、自分たちを守ると言ってくれた勇者のため、誰もがジェレイと同じように涙をあふれさせる。

友を失い、悲しみにふけるジェレイだがいつまでも悔やんでいるわけにはいかない。キツと目じりに力を籠め前を見据えると玉座に集まる臣下たちに号令を發した。

「早急に魔王を倒す策を講じる。魔族を根絶やしにするのだ！」

ジェレイの言葉に誰も否はない。手早く地図を広げ魔王を倒すための作戦会議は始まるのだった。

リオデンテ王国 首都・メキエスト

城下に行く豪華な馬車の中でレシカは頼杖をついて街中の様子を窓から眺めていた。

勇者が倒れたという事実を知らない民はまるで平和が訪れたかのようにいつもと変わらない日常を過ごしている。

事実を知ったらこの街はどうなってしまうのだろうか。レシカは不安に胸が痛んだ。

幼いころから王族としての教育をしてきたレシカにとって民は何よりも優先して守らなくてはいけないものだ。たとえ王族が居なくとも国はなくなるらない。王あつての国ではなく、国あつての王。そして国あつての民ではなく民あつての国。それがレシカのいうかリオデンテの王族の考えだ。

だからこそ勇者が倒れたという報は民に要らぬ混乱を招くことになるため伏せられている。しかし、魔王を倒すための具体的な策が勇者以外にない以上、この平和も長いものではないのかもしれない。

「どつすればいいのかしら……」

レシカは勇者を倒せると信じていた。それは兄が友とした望月大地という青年を信じていたのではなく、勇者と言う存在が魔王を倒すための手段であると信じていたからだ。

だからこそレシカは魔王を倒したあかつきには褒美として勇者と結婚するのはしょうがないことだと思っていた。召喚された当初は魔王なんて倒せるはずがないとこねていた勇者を誘惑し魔王と戦うように差し向けたのだ。

本当なら好きでもない相手を誘惑するなんてしたくはなかったが、国のため、民のためと自らを納得させ我が身を犠牲にすることで民が助かるのならと行った一大決心だったというのに。

今は亡き勇者の姿を思い出す。容姿が整っていないわけではないが、レシカは彼のことを好きではなかった。好意を抱かれているのだから嫌な気はしなかったし人間性も悪くはなかった。が、だからと言って恋愛の対象になるのかと言えばそうでもない。

王族であるレシカは恋愛ができないとあきらめているので、恋愛の対象にならないからと言って結婚を断るつもりはない。兄が自分を政治の道具と違っていないことは知っていたが、兄と同じく自らも王族なのだ。レシカは率先して国のために自らを犠牲にする心積もりだった。

「ジェレイ様に何の断りもなくヴェルチェ帝国に向かうなど本当によろしいのでしょうか？」

馬車の中で、心配そうな表情を浮かべているのは侍女のマルグリットだ。幼いころからレシカとともに育った彼女はレシカの専属として彼女の数少ない心許せる人間の一人だった。

「お兄様は国王として城から出ることはかないません。同盟を結ぶためにはお兄様と同じとは言わないまでも王族である私が行くのは当然のことでしょう?」

「しかし……せめてジェレイ様にお伺いを立ててからの方がよろしいのではないのでしょうか?」

ヴェルチエ帝国と同盟を結ぶという意見はずいぶん前から魔族に對抗する策として提言されていた。しかし、人族至上主義を掲げる帝国と万民平等を謳うリオデンテには深いとは言えないまでも溝がある。

同盟はどうするかという話をしているところで勇者の召喚に成功したため結局うやむやになっていたのだが勇者が倒れた今、早急に魔族との戦いに対策を講じる必要がある。

広大な領地とそれに伴う人口を誇るヴェルチエ帝国と豊富な資源を誇るリオデンテ王国が手を組めば鬼に金棒。魔族との戦いは一気に有利になると以前から考えられていたことだ。

「お兄様は勇者が倒されたことで冷静ではありません。一刻も早く

同盟を成さねばこの国は魔族によって滅ぼされるでしょう」

「ですが……」

「マルグリット……お願い。私を信じて」

「レシカ様……」

馬車は今まさにメキエストを出ようとしている。レシカを止めることができるのはここが最後の場所となるだろう。しかし、マルグリットは何も言わずうなづいた。

「このマルグリット、レシカ様に地の果てまでお供させていただきました」

「……ありがとう、マルグリット」

馬車はメキエストの門をくぐる。目指すはヴェルチエ帝国、首都ザキミエルだ。

リオデンテ王国 王城

レシカがメキエストを出た翌日、ジェレイは魔族との戦いに講じ

る策を考えるのに頭を痛めているところにレシカがヴェルチエ帝国へ向かってメキエストを出たとの報告を聞いた。

同盟に関する議題は凍結されていただけにその一報は会議をしていた一同の意見を二分した。

片やヴェルチエ帝国と手を組めば鬼に金棒だという意見ともう一方は同盟は早計過ぎるとの意見だ。

しかし、ジェレイが心配することはそんなことではなかった。ヴェルチエ帝国と同盟が成せるのならば成した方が戦術の幅は大きく広がり、勝利の目も大きくなるだろう。

だが、国の思想が大きく違う両国で手を取り合うには超えるべき障害が多すぎる。そしてなによりも問題なのはヴェルチエ帝国の帝王が非常に強欲な人間であるという点だ。

以前先王であるゼアが同盟を持ちかけた際にはゼアの妃にしてジェレイやレシカの母、ミレイアを差し出すよう要求してきた。その時は愛する妃を差し出すことはできないと同盟は成功しなかったのだが、今回はどのような要求をされるのかと考えてまず第一に思いつく要求に怒りが込み上げてくる。

まず間違いなくヴェルチエ帝国の帝王はレシカの身を要求するだろう。帝王が困っている妃はすでに15人。そのすべてが同盟や隷属を申し出た国の王族だ。

醜悪な帝王に愛するそして、友が唯一愛した大切な妹を差し出すなどジェレイには考えたくもないことだった。だが、ジェレイには妹であるレシカの考えがわかってしまう。

リオデントテにとっての模範的な王族であるレシカであれば、我が身を犠牲にして同盟を成そうとするだろう。

「っく、レシカを止める。何としてもヴェルチエには行かせるな！」

乱暴に地図の広げられたテーブルを叩きながらジェレイは怒鳴るようにそう命じた。

草原 リオデントテ・ヴェルチエ間の道

メキエストを出てから1日が過ぎた。今頃はジェレイの下に自分がヴェルチエ帝国に向かったという報告受けたころだろう。

ヴェルチエ帝国の帝王についてはレシカも知っていた。自分も帝王の妃の一人となるのだろうと決意も固めている。国を救うため、民を救うためには必要なことなのだ。どこまでも広がる草原を見つめながらレシカは胸元に置いた手を固く握りしめた。

ジェレイが差し向けた追手が来るかもしれないが、なんとしてもヴェルチエ帝国にたどり着かなくてはいけない。もどかしい気持ちで進行方向に目を向けると何か黒い点のようなものが草原のはるか先に見受けられた。

「ひひーんー！」

「つきや!？」

突然馬が嘶き足を止めた。結構な速度で走っていたのに急に馬が止まったおかげで馬車の中はひどく揺れる。

いったい何事かと再び窓の外を見るとそこには醜悪な見た目をした異形の怪物たちが馬車の周りを囲んでいた。

「まさか、魔族がこんなところまで!？」

「レシカ様!」

マルグリットは馬車に備え付けられていた使い慣れない剣を手にとってレシカの前に立った。

周囲の魔物はじりじりと馬車ににじり寄ってくるがまだ攻撃してくる様子はない。

リオデンテとヴェルチエをつなぐ街道は魔族が支配する地域とほだいぶ離れた場所にある。これだけの規模の魔族に襲われるなどレシカには到底信じられないことだった。

「ひいー!」

突然魔族に襲われ、恐怖した御者が馬車から飛び降り逃げ出そうとした。しかし、周囲をぐるりと囲まれているために逃げられるような隙間はどこにもない。哀れな御者は逃げた先にいた魔物に捕まりその命を奪われた。

「っ！」

姫として育てられ人が死ぬようなところを一度も見たことのないレシカは思わず息をのんだ。目の前で魔族に命が散らされるその光景は今までに見てきたどのような凶事を前にしたよりも凄惨の一言に尽きる。

「ご安心下さいレシカ様。レシカ様はこのマルグリットが命を懸けてお守りいたします」

レシカとともに育ち、剣など振ったことがないマルグリットはなんとか己を奮い立たせようとしているがその足は震えていた。10匹以上の魔物を前にして今まで平和に暮らしていた自分たちが平気でいられるはずがない。

レシカはマルグリットの姿を見て自分もおびえてばかりはいられないと剣を取った。

「レシカ様、何をなさるつもりですか!？」

「無理をしないでマルグリット。あなただつて剣を振ったことはないのでしょう？だつたら一人よりも二人で戦った方がいいと思うの」

戦いの心得などなにもない自分たちがこれだけの魔物を前にして生き残れるとは思えない。ヴェルチエ帝国との間に同盟を成すために国を出たというのにこんなところで無駄死にすることになるとは思つてもみなかったがマルグリットを一人で戦わせて死なせるわけにはいかなかった。

どうせ死ぬのならばなんの抵抗もしないなんておとなしい死に方はしたくない。たとえ無駄死にでも魔族の一匹ぐらいは道連れにしないと死んでも死に切れるものではない。

「レシカ様……」

マルグリットは目じりに涙を溜めて微笑んだ。マルグリットも助からないとわかつているのだらう。しかし、生まれてからずっとともに育った友と言える彼女だ。できることなら死ぬのも一緒にでありたい。

レシカは剣を強く握りしめると馬車の扉を乱暴に開いて草原に躍り出た。

マルグリットもレシカとともに馬車から飛び出し、振り方もなにもなっていないが剣を振るう。

レシカの方も初めて持つ剣の重さに振り回されるように剣を振っ

た。だが、彼女たちは戦士ではない。当然のことながら勝てるはずもなく剣ははじかれ逆に手痛い一撃を喰らってしまった。

「ま、まる……ぐり……つと……」

「……………れしか……………さま……………」

このまま自分たちは魔族に食い殺されるのだろう。薄れゆく意識の中でレシカはそう考えた。

最後までマルグリットとともに、なんとか手を伸ばしマルグリットの手を掴もうとするがその手は虚空をさまよい、やがて地に落ちた。

草原 リオデンテ・ヴェルチエ間の道

日もどっぴりと暮れ夜の帳が落ちたころになってレシカは目を覚ました。

傷ついた額や腕には包帯が巻かれ、隣ではマルグリットも同じように手当てをされて横になっている。

自分たちは魔族に襲われたはずだと思い周囲を見渡してみるが魔族らしい姿はどこにも見当たらなかった。ただ一人、馬車につながれていた馬とともに火を囲み、何かを食べている様子の男が一人いるだけだ。

「勇者……様？」

まるでその姿は幼いころに見た物語の勇者のようだった。

窮地のお姫様を救う勇者の物語。レシカは幼いころそんな物語が大好きだった。寝る前には乳母にせがんで何度も絵本を読んでもらい、いつか自分もこんな風に勇者様と結婚するんだと想像していた。

王族として成長するにつれそんな幻想は抱かなくなっていたが、どこかでそんな希望がなかったと言えば嘘になる。

そして今、自分の目の前に勇者がいる。自分の窮地を救ってくれたであろう勇者が。

レナは今このとき、目の前の勇者に恋をした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0594w/>

勇者はじめました

2011年11月16日02時00分発行